

第1日目 早朝に仙台市へ着き、JRで岩沼市へ移動。岩沼市ボランティアセンターに昼前に到着したが既（4月30日）にボランティアの受け付けは終了していたので、石巻市の松永君のお見舞いに行く事とした。



岩沼市仮設住宅



岩沼ボランティアテント群

岩沼駅から再びJRに乗り仙台駅経由で東塩釜駅で降りる。JR石巻線が東塩釜駅以東が不通なので、ここよりJR代行バスに乗り込む。途中『松島や〜』で有名な松島を通過して終点石巻駅の1つ手前の陸前山下で下車。都合の良い事にこのバス停は松永君宅の真ん前であった。私が降り立った道路が松永君の家から見ると川になっていたらしく、『その光景は一生忘れられない。自分が2階から船で助けられることになろうとは想像もしていなかった』との話を松永君より受け、その災害の規模に言葉を失う。



松永君と。後ろに見えるのが松永君宅。



松永君の店より購入したショベル

東塩釜から陸前山下へ移動中のバスに乗っていると自衛隊の車両と頻繁にすれ違った。カウントしてみると平均して20台に1台の割合。平時の大阪から来ると陸自車両がこんなに多く走っている光景は違和感があり、非常時である事を再確認させられた。床上浸水した家財道具が道路わきに積み上げられていた。



自衛隊車両



積み上げられた家財道具

第2日目 早朝よりボランティア登録の為にセンターへ行く。07:30の時点で既に300人の行列。08:30より受付開始したがボランティア希望者が多い為に作業のマッチング処理が出来ず、午前200人、午後200人、合計400人のみが作業できる事となった。残りの100人余は作業できずに帰らなくてはならない状態。私は午後の作業に登録できた。



07:30時点での行列



ボランティアセンター内の寄せ書き

午後1時より作業開始。海岸から約1.5km離れたお寺の整理、清掃作業。お寺は津波により約2M浸水し、車などの漂流物が激突した為に1階部分が破壊され、辛うじて柱が無事であった為に屋根のみが残っている状態。住職さんより墓石の整頓を依頼されるが、さすがに重機が無いと無理なので、通路の泥カキに終始する。作業後、住職さんより話を伺い、500m程離れたところに100戸ほどあった民家が完全に無くなっている事を知り愕然とした。



お寺に隣接する墓地



田んぼの中の信号機

長い間この地に居ると、初めはびっくりした光景に驚かなくなる。あぜ道に車が転がっていても、海岸から数km離れた田んぼの真ん中に70cm位のおそらく海の回遊魚が数匹異臭を漂わせていても、何とも感じなくなるのが怖いと、当地へ来て数週間になるボランティアの人々が言っていた。

作業を終えボランティアセンターへ戻ると、大阪から来た『かすうどん』炊き出しボランティアが来ていた。ボランティアと言えば自身が被災者の為に何か作業をする事を考えがちだが、この様にボランティアの方たちをサポートするボランティアの形があるのだなあと感心させられた。



大阪名物かすうどん



炊き出しの行列に並ぶ

第3日目
(5月2日)

昨日受付に長蛇の列ができた事を踏まえ、07:00にセンター前に行く。平日なので昨日に比べ人数は少ないと思っていたが、07:00時点で昨日07:30とほぼ同じ人数が並んでいた。本日も午後の組になってしまい半日作業かとがっかりしていると、急遽大口依頼が入り全日作業で50名募集するとの事。この募集に応募し、ビニールハウスの泥カキ作業をした。午前中に2つ、午後に1つ、合計3つのハウスを処理。持ち主曰く、どんどん水を入れて土に染み込んだ塩分を取り除き今秋より作付けを開始したいとの事。



ハウス表面。ヘドロが乾いてひび割れている



作業後にハウス持ち主から話を伺う。このハウスの場所は海から約2.5kmの位置だが、海岸との間に工業団地があり、この工業団地が堤の役目になって車などの漂流物がハウスまで流れてこなかったため、ハウスの骨組みは破壊されずに助かった。工業団地は大きな被害が出た。ほんの1km程離れたハウスは海岸からの距離はほぼ同じだが、漂流物に破壊され跡形もない状態。畑は元々水はけの良い所に有るので水で塩分を洗い流すことが出来るが、水田は手の打ちようがないとの事。

第4日目
(5月3日)

本日は06:45にセンター前に並んだが、やはり既に300人くらいの長蛇の列。昨日と同様に大口の依頼が入り、それに参加する。地域で一番大きな農家の清掃で、家は半壊、大事な物を家屋から搬出し清掃作業を行う。家屋はもったいないが取り潰す予定との事。取り潰す家屋であっても廃棄物を分別しなければならず、手作業での回収、分別、廃棄は非常に手間がかかる。



屋にトン汁と白飯を頂く。ここ2, 3日は保存食ばかりだったので非常に有難かった。



作業を終え公園の東屋で集う
ボランティアの連中



スロベニア人の親子

第5日目
(5月4日)

毎日朝早くから列に並び、3時間かけて作業の振り分けを待ち、作業が出来るのは午前か午後の2時間のみ(ラッキーであれば通しの作業が出来る)の状態が続き、こんな無駄な時間の過ごし方は無いと思い、社会福祉協会(以下、社協)とは別にテント村の有志を募って行われているボランティア活動に参加する。彼らは既に1か月近くもボランティア活動をしており、俄かに増えた社協系ボランティアとは一線を隔して活動をする事に誇りを持っている連中である。その活動は確かに社協の作業とはスピード、仕事量が半端でなく、私など、ものの1時間で握力が無くなり、膝がガクガク震え出し、挙句の果てに朝食った物を総て吐いてしまうほどであった。そんな作業を彼らは毎日毎日、日曜日の休みも無く黙々と行っている。そして1軒、また1軒と綺麗になって行く家を見て満面の笑みを浮かべている。これぞ本当のボランティア活動だとつくづく感じ入った。

作業を終え、クタクタの状態で夜行バスに乗り込み岐路に立つ。

まとめ

震災発生以来、連日報道される被災地の状況を見、何か役に立ちたいと考え続けてきた。ようやく纏まった休みが取れたのでボランティア活動を行ってきたが、あまりにも広範囲な被災であるためにどこから手を付けたらよいのか途方に暮れてしまうと言うのが率直に受けた印象であった。そんな中でも被災された方々は明るく振舞っておられ、その笑顔の奥に有るものは諦めではなく、復興への強い思いである事を感じた。また、ボランティアには様々な形がある事も今回実感した。献血、義援金もそうだが、ボランティア活動が長期にわたって行われるためには、ボランティアをサポートするボランティアの存在が大変重要且つ不可欠であると感じた。岩沼ボランティアセンターの横に設営されているテント村は住宅地に隣接する公園に設けられており、近所の子供たちの遊び場を占有し、公共のトイレ、水道を使わせて頂いている。どんなに気を配っても人が集まれば騒がしくなり、近所からのクレームも絶えない。岩沼テント村では我々が勝手に村長と呼んでいる田中さんと言う人物がおり、その人の指導のもと自分たちでルールを作り、清掃、近所との交流が上手くなされていた。この様な存在に対する支援が重要であり、私は今後も継続的に行いたいと思う。